

県書道連盟会長などを務めた矢板市の書家、故柿沼翠流さんの遺墨展が12月3～5日、県総合文化セン

柿沼翠流さん遺墨展

ター第4ギャラリーで開かれる。初期から最晩年までの作品67点が出品されるほか、一男で書家・現代アーティストの康二さんが東京五輪・パラリンピックのポスターとして書いた作品「開」も特別出品される。柿沼さんは2019年12月、病気のため83歳で死去。生前は県内の書道関係者が会派やジャンルを超えて集う県書道連盟のまとめ役を

長く務めたほか、教員時代の教え子らと書道研究会「書泉会」を立ち上げるなど本県書壇をけん引。後進の育成に力を注いできた。手島右卿、山崎大抱らに師事し、1972年独立書道展特選。87年には「はふり火を：(斎藤茂吉歌)」で手島右卿賞を受賞した。46歳で教職を辞し書に専念。「重厚な作品、軽妙なタッチの作品など、多彩な



生前、「不器用だが自分なりに生ききった」と語っていた柿沼翠流さん

書歴振り返る67作品

表現で見る人を魅了する作品を制作し続けた」と書泉会共同代表で県独立書人団代表の斎藤一吼さんは師を振り返る。

遺墨展は「はふり火を：」をはじめ、王羲之の臨書や迫力ある一字書など、書歴

来月3～5日に
県総文センター

をたどる幅広い作品を展示。豪快でありながら繊細さをも内包した作品は、厳しい中に思いやりのあった柿沼さんの人柄に通じ、さまざまなお品からその魅力を感じ取ってほしいとしている。遺墨展に合わせて、作品や

足跡を取めた図録も制作した。晩年の作という「母」について、康二さんは「人生の全てから培った感覚と哲学が凝縮された、父らしい爽やかな魂の爆発」と評する一文を寄せている。午前10時～午後5時(最終日は同4時)。(宇賀神いづみ)



柿沼翠流「母」(87×117号)

